

# KELES Newsletter

## 関西英語教育学会報 2022年度 第3号

事務局：〒603-8555 京都市北区上賀茂本山

京都産業大学 外国語学部 平野亜也子研究室内

E-mail: [kelesoffice@gmail.com](mailto:kelesoffice@gmail.com) 学会ウェブサイト: <http://www.keles.jp/>

2023年1月31日発行



### 第26回卒論・修論研究発表セミナーのお知らせ

2023年2月12日 オンライン開催

日時：2023年2月12日（日）9:30-17:30

形態：オンライン

参加費：会員・非会員とも無料

当日はスペシャル・トーク講師に竹内 理先生（関西大学 外国語教育学研究科・外国語学部 教授）をお迎えして、「信じれば救われる？—英語学習における自己効力感、学習方略、自己調整の役割について」というタイトルで、ご講演いただきます。

また、学生・院生の皆さんにご発表いただきます。英語教育に関する様々なテーマで執筆された力作が

集まっております。将来の英語教育をともに考える同志たちとの語らいの場とするためにも、先生方に励ましの言葉をかけていただけましたらありがたく存じます。

多くの方にお越しいただき、実り多きセミナーになればと思っております。ご参加、心よりお待ちしております。

詳細はKELESウェブサイトをご覧ください。

[http://www.keles.jp/news/keles26\\_thesis/](http://www.keles.jp/news/keles26_thesis/)

### 報告 関西英語教育学会 第55回 KELES セミナー

開催日：2022年11月13日（日） オンライン（Zoom）開催

第55回 KELES セミナーでは、「英語授業における ICT 活用：効果的な指導と評価」をテーマとして、京都産業大学のラボレット・エリザベス・ホリー・パフ先生と、神戸市外国語大学の濱田彰先生にご講演いただきました。

「GIGA スクール構想」などにより、児童・生徒が1人1台の端末を持ち、授業を受けることが当

り前になりつつあります。しかし、授業によっては、デバイスを使用すること自体が目標になっている現状があります。授業でデバイスを使用するのは何のためか、といった目的を考え直し、授業で活用することを考え直すことができたセミナーでした。

お申込み・ご参加いただいた66名の皆様に心から感謝申し上げます。次頁で、報告を記します。

## 「『ライブクイズアプリ』

—理論的・実証的な根拠に基づいた効果的な使い方—

講師：ラボレット・エリザベス・ホリー・パフ先生

(京都産業大学)

ラボレット先生のご講演では、「GIGA スクール構想」の実現により、生徒一人に一台の端末が与えられるという ICT 環境に直面し問題を抱える教員へのサポートとして、ICT ツールの一つである『ライブクイズアプリ』を3部構成でご紹介頂いた。

まず Part 1:『ライブクイズアプリ』の紹介では、オンラインで簡単に使用できる『ライブクイズアプリ』について、その効果や利便性などを詳しくご説明頂いた。『ライブクイズアプリ』では、アプリ上の様々なアクティビティを通して質問に答えるため、生徒はゲーム感覚で活動し授業に参加することができる。授業中に行う小テストなどの Low-stakes testing 向けで、解答はその場で提示されるため、フィードバックを即座に行うことができ、時間の節約となり頻繁に使用することができる。それにより記憶力・学習ストラテジーを向上させ、間隔練習効果により学力格差を縮小できる。何よりも生徒側も楽しんで行うことができる、というものであった。準備も簡単で印刷や配布の必要がないため、大人数の講義でも、少人数のゼミなどでも利用でき、スマホを使い慣れた学生であれば問題なく操作できるため、すぐにでも導入できるアプリであった。

Part 2: ワークショップでは、実際に“Pear Deck”というアプリの使い方の説明とデモを行って頂いた。アプリ上でのクイズ作成の手順を丁寧にご説明頂き、参加者は実際にオンラインでアプリを操作し、アクティビティを実践しながら参加することができた。6つのアクティビティを目的や用途によって使い分けることで、様々なクイズを作ることができ、また生徒は答えを確認しながら進めることができるアプリであると実感した。一度作ると繰り返し使用できるということも魅力の一つであった。

Part 3: 質疑応答では、アプリ作成時のトラブルをその場で解答して頂き、参加者は無事にクイズを作ることができた。

今回のご講演でご提案頂いたアプリであれば、問題作成に自信のない教員でもすぐ使えるアプリである。ついつい億劫になりがちであるが、まずは使ってみることが大切と実感させて頂いた。

報告者：齊藤 倫子 (関西学院大学)

## 「英語授業の『めんどくさい』から始める ICT 活用術」

講師：濱田彰先生

(神戸市立外国語大学)

濱田先生からは、「Concepts: 英語教育における ICT」、「Think: ICT で問題解決できるかの肌感覚」という2つの柱に沿ってお話をいただいた。初めに、本講演における「めんどくさい」とは、手間暇かけてやる必要があると分かっているにもかかわらず組みづらい事柄等を指し、日々の授業においてどのような「めんどくさい」が発生した時に ICT が活躍するのかについて事例を交え詳しくご紹介いただいた。

一つ目の柱「Concepts: 英語教育における ICT」では、学習や思考の可視化できることが ICT の強みであることや VISIBLE LEARNING (John Hattie, 2009) より ICT の教育効果が示され、単なる ICT の使用に留まらない効果的な活用が求められると述べられた。また、ICT の役割には、情報の提示・共有・管理があり、活用の際には、指導者と生徒・生徒同士のコミュニケーションやネットワークを使う学習形態が重要であると指摘された。また、多忙な教育現場において、紙やペンよりも ICT を用いることが効果的か、また使用するコンテンツによって持続的な授業準備が可能かを検討する必要があると述べられ、意図的で計画的な ICT 活用の重要性を改めて気付かせていただいた。さらに、Pear Deck や Google Document 等の活用例をもとに、ICT を活用した学習状況の把握と机間指導の併用により、よりよい指導につながることもお示し下さった。

続いて、二つ目の柱である「Think: ICT で問題解決できるかの肌感覚」では、やりたいことは大抵実現可能であること、また、その実践例を探し出して採り入れられるかどうかのポイントであるとされ、まずは問題を整理し、解決しなければいけない点や何が解決できるかを検討することが大切であると述べられた。そして、電子ノートを活用した学習方法の共有事例や Group Transcribe の活用例をもとに、取り組み始めの労力とそれらを活用できるようになった時の利点とのバランスを考えたり、同じ機能を他の場面でも活用できないか考えたりすることも大切な視点であると提案された。

まずはできることから始めてみようという気持ちにさせていただいた大変示唆に富むご講演であった。

報告者：俣野 知里 (京都市立二条城北小学校)

# 報告 関西英語教育学会 第56回 KELES セミナー

開催日：2022年12月18日（日） オンライン（Zoom）開催

第56回 KELES セミナーでは、「高校英語『論理・表現』をどう指導し、どう評価するか」をテーマとして、本学会の副会長でもある神戸大学の横川博一先生と常翔学園中学校高等学校 教諭の溝畑保之先生にご講演いただきました。今年から高等学校で始まった『論理・表現』では、何を大切にすべきなのかを考えることができたセミナーでした。

お申込み・ご参加いただいた92名の皆様に心から感謝申し上げます。以下、報告を記します。

## 第56回 KELES セミナー

### 高校英語『論理・表現』をどう指導し、どう評価するか

「高校英語『論理・表現』で育てたい力  
—教科書をどう使うか—

講師：横川博一先生（神戸大学）

横川先生のご講演では、高校英語『論理・表現』について、本科目の狙い・育成すべき力・実際の指導に対するご提案という流れでお話いただいた。

まず前半で先生は英語教育を持久走に例えられ、競わせ何周も速く走ることを目指すのではなく、走ることを楽しむこと・目標を自身で定めその「選択」次第で成功することが出来るという体験をし、子どもが主体的に持続し何かに取り組んでいくことが必要であるという、指導における重要性を強調された。その上で、新たに登場した『論理・表現』とは、ライティング・英語表現などの流れに沿った科目ではあるが英文法を教え学ぶだけのものではなく、英語での発信力に焦点を置き、実際に使いながら学んでいくまったく新しい科目であると述べられた。

また、先生はどんな子どもたちを育てるかについてマクロ・ミクロの視点で考える必要性を述べられた。変化が著しいこの時代に対応していくためには、学習者が主体的・能動的に学び続け、探求的に学習し広く深く考える力を育成していく必要がある。そのために『論理・表現』授業の仕向け方として、実践ベースで「考える」ことから調べる・使ってみる・議論するなどの学習段階を学習者が楽しみなが

ら行い、各段階での多くの知識・技能の使用機会の中で自身が必要であると感じたものを獲得していくことができる、冒頭の持久走のように自身で目標を立て（直し）フィードフォワードし、自信をつけ持続し取り組んでいくことができるような授業を提案され、このような学習サイクルにより、学習指導要領で育成を目指す資質・能力の育成にも結びついていくのではないかと述べられた。

後半ではこのお考え・学習サイクルに基づき、先生ご自身が経験された観光客の方への道案内・国際シンポジウムなどのお話等も交え楽しく、実際の指導に対するご提案についてお話いただいた。その中で先生は、学習者の話す・書くプロセスにより着目する「トップダウン・スピーキング/ライティング」を提案され、発話計画を出発点とし「考える」ことから、自分の考えを表現するために必要な語彙や文法を使いながら身に付けていくことへ移行する流れを意識した学習を行うことの重要性を述べられ、これをどのように授業内活動へ取り入れていくか、先生ご自身が編集に携わられた教科書も用い多数の活動例をご紹介いただいた。また、授業を行っていく中で、スピーチやディスカッションなどは、「論理・表現力」を効果的に身に付けるためのツールとして考えること、入試問題などでも問われる「考える力」こそ普段から育成し、また、学習者が主体的に学習に取り組みながら「思考力・判断力・表現力」をスモールステップで身につけていく必要があるということなどを述べられ、それら活動の積み重ねがこれまでの英語教育におけるチグハグの解消、また、皆が楽しみながら英語の学習を行っていく授業へとつながるのではないかと示唆された。

指導において試行錯誤の日々で今の方法で良いのかと不安に思うこともあったが、ご講演を拝聴し、「楽しみ」・「必要を感じて」・「自信」など数多くのキーワードの中で、私だけでなく一人一人がこれまで、また、明日からの授業に向け考える機会をいただくとともに、背中を押していただいたような、示唆に富む素晴らしいご講演であった。

報告者：濱田 真由（神戸大学）

## 「『テーマ作文』、『スピーキングテスト』、 『定期考査』をつなげて生徒の『自律性』を伸ばそう」

講師：溝畑保之先生

(常翔学園中学校高等学校)

溝畑先生の講演は、現代の日本の英語教育に対して警告を発信される形で始まった。まず、詰め込み式の教育により学生の英語への苦手意識が促進されることを挙げられ、さらに教育予算の減額により英語教育で理想とされるアクティブラーニングや探求学習を推進しづらい大規模クラスとなってしまうことを危惧された。その上で、教師が生徒と共に学力の3要素である「知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働」について話し合う重要性をお話しされた。特に少子化が進むことで厳しい経済となる世の中では、英語教育を通じて主体性・多様性・協働を伸ばすことが肝要であると説明された。理由は、個人が競争に勝ち抜く力をつけるのではなく、学生同士が相談し、お互いの強みを活用しながら助け合う経験やスキルが社会を生き抜いていく上で大切であるからだ。その上で、教師が担う役目として、知識の専門家と同時に学びの調整を行うことであることを強調された。

先生の講演で軸となったのは、学生の学習を測る上で重要となるルーブリックについてのご説明であった。最初にルーブリックの元となる Can-Do リストを作成する上で大切なこととして、大学受験をゴールとしてそこから遡る必要性を話された。第二に、アセスメントを行う際には、「体験→失敗→振り返り→修正」のプロセスを繰り返し踏ませることが肝要であると述べられた。先生が実践されてこられたス

ピーキングやライティング活動のご紹介では、学生が失敗を恐れずに学習を実体験し、自身やクラスメートのパフォーマンスを分析しながら改善に繋げるというプロセスが明確に示されていた。評価することだけを目指とせず、アセスメントでさえも学習経験の機会として捉えるこのアプローチの重要性を再確認できたのは私だけではなかったはずである。次に、高木俊輔先生のお話を引用されながら、2種類のルーブリックについてご説明された。1つ目は Deficit、欠落モデルで生徒が出来ないことを軸に評価する方法である。こちらのモデルでは、学生は自分は何が出来ないのか、足りないのかを教師に示してもらおう。もう1つは Developmental、何ができるレディネス発達モデルである。こちらは Deficit モデルと異なり、学生が何かを成し遂げたことを明示する評価方法である。こちらのモデルを使う利点として、目標レベルに向かってより高みに近づいていることを生徒が実感することがある。このような前向きな経験を積ませることで、学生の自己肯定感が高めることが重要であると先生はお話しされた。最後に、ルーブリックの内容・評価方法を学生に明示することが大切であるとご説明された。これは学生がルーブリックを理解することにより、次の目標設定をしやすくなるからである。

あっという間に時間が過ぎてしまった講演であった。教育の目的は、学生を評価することではなく、学生により豊かな人生を送ってもらうための手助けであると再認識する機会を頂けた貴重な時間を過ごせた。

報告者：浅羽 真由美 (京都産業大学)

## 学会事務局からのお願いとお知らせ

### 学会費未納の場合のお取り扱い

KELES 規約では、当該年度の学会費納入締切日は2月末日となっております。それまでに学会費納入をいただけない場合、ご退会と判断させていただきますこと、ご了承願います。

2023年度の全国英語教育学会(香川大学)での発表資格は、2月末日までに会費を納入された会員様のみとなっておりますので、ご注意ください。

なお、学会費が未納の方には、お名前を記入した「学会費納入のお願い」を、本Newsletterと一緒に

に同封しております。払込先を記載しておりますので、納入をお願いいたします。

### お知らせ

第55回、56回セミナーの動画を会員限定で2023年3月末まで公開させていただきます。KELES ウェブサイトのセミナーのページへ入っていただき、下記パスワードをご入力ください。(パスワードの会員以外の方への共有はお控えください) **二次元コード・パスワードは紙媒体で配布**